第4代中央気象台長

岡田武松事蹟（Ⅵ）

附略年譜

堀内剛二*

8. 国営移管（承前）

8.3. 中央気象台雷災

国営移管の進渉と同時に，諸規程の整備が見られた．即ち，昭和14年中央気象台達第1号（1月1日）中央気象台諸規程制定内規．中央気象台内訓第1号（1月1日）中央気象台支台及び中央気象台附属測候所掌理事務規程改正，同第2号，中央気象台附属飛行場気象観測所掌理事務規程改正，同第3号，中央気象台附属観測所及び中央気象台出張所掌理事務規程改正，である．

昭和14年3月17日～20日開催の気象事務打合会中，18日午前岡田武松は測候事業改善案につき講演した(1)．

「本邦の気象事業は，近年俄かに勃興した航空産業等の諸方面より種々の要求が多くなり，従来の僅少なる従業員と貧弱なる内容とでは，如何に努力しても最近の情勢に即応して行くことが出来なくなったので，茲に事業の内容及び組織を急速に改善する必要に迫られたのであります．改善すべき事柄は甚だ多いのでありますが，第一に着手す可きは地方測候所を国営に移管し，現在の附属測候所と共に物的及び人的の方面を改善することであります．此事は今から凡そ15，6年程以前から毎年実現に努めたのでありましたが，今回漸くその気運に向ひまして若干の測候所は既に本年度に於て国営に移管され，残りの全部の測候所も亦14年度中に移管されることに内定したのであります」

そして地方測候所の組織について，

「地方測候所の移管が完成した後の組織に就て申しますと（略）全国を天気予報と産業気象の二方面から見て九個の気象区に分つことが最も適当のように思へますから，各区に一ケ所宛の地方気象台が置かれるのであります．此九個の気象区を更に天気予報の関係で，各地の気象無線報が15分乃至30分以内の時間で集め得ることの必要から，本邦を北部，東部，中部，西部の四管区に分ち，北部気象台は札幌で，東部は東京に，中部は大阪，西部は福岡に置く積りであります」

と，気象区並び管区制の構想を述べた．

この外，区内観測所を1県15所内外に整理して質的改善をはかること，ラジオの普及に伴い暴風信号標を改廃すること，気象官署にて地方色ある諸調査を行い民生寄与に資すること，なお，観測器械の改善，諸報告の正確，図書の整理，職員の再教育，気象協議会改組，等広範且詳細に亘って方針を述べた．

これらは，勅令第740号（昭和14年10月31日）気象官署官制23ケ条となり，続いて文部省令第51号（11月1日）を以て気象官署の名称及び位置を定め，同じく，文部省令第52号（11月1日）にて気象管区，地方気象区及び其所轄区域を定め，文部省告示第438号（11月1日）にて観測所，出張所及び検潮所を定めた．

明けて昭和15年中央気象台告示第1号（1月10日），気象官署所轄測候区の名称及び区域，同第2号天気予報気象特報暴風警報規程改正，同第3号気象通知電報式中改正，以上2月1日実施．同第4号（2月14日）気象放送規程改正，3月1日実施，を見た．

昭和15年3月18日，仙台での第8回樺太北海道東北6県気象協議会にて武松は次の如く訓示した．

「国営移管になりまして，県測候所時代より悪くなったとか，経費の使ひ方も不自由になったとか云ふ不平の声を聞きますが，これは昨年（14年）11月に国営移管になった為に，種々の点で準備が出来なかった為であります．（略）予定通り整備が出来上りますれば充分よくなるのでありますが，これを理解せられないで，国営になったから尚も不便であると云ふ方のあるのは，困ったものであります」(1)

このように国営移管は成ったが，業務面での種々の困難は累積した．その最たるものは気象要員の補充であった．

「只今，気象台に人を御請求になってもどうにも出来ない状態にあります．例へば，専修科卒業生に就てみましても，原則としましては，前任地に帰すこととし，特に本人の希望があれば勤務地を変更することになって居りまして，気象台では勝手に致さないことになって居ります．そんな事情であるから，何度専修科を繰返して開催しても人の殖える見込は少しもありません」(2)「今年の本科の卒業生は，大部分入営することになって居りまして地方にも東京にも配員することは不可能であります」

昭和15年4月5日，高松宮の中央気象台台臨を見た．

* 気象庁研修所

(1) 測候時報　10巻5号

(1) 測候時報　11巻5号　(2) 同　上

武松は藤原咲平と台内を案内し，後阿部正直の雲の映画を見せた．その4月19日，嘗ての隣人佐木虎士が逝った．享年75才であった．

2カ月後の6月20日夜，中央気象台は落雷による火災に類焼した．(1)

「20日夜猛烈な雷雨が帝都一帯を襲ひ，市内の諸所に落雷した．此内22時頃大手町の逓信省航空局へ落雷したものは火事を起し，同局を始め之に隣接せる厚生大蔵両省，企画院，税務監督局等の木造バラックに延焼し，中央気象台の大手町本館も亦悉く類焼するに至った．」

「台内の復旧は21日から開始され，本部を中村記念館に設け岡田台長の指揮に従って全台員，養成所職員及び学生の全部外に凌風丸，朝汐丸の船員諸君がそれぞれ作業に努力」「22日には早くも露場の一隅にバラック建の工作場の一部が出来上った」

「雷火災の為類焼した丸の内官衛街の復興建築は，焼跡の整理後直ちに大蔵省営繕管財局で各官衛の設計及び工事に着手し，7月30日に地鎮祭を挙行（略）中央気象台の建物は（略）大林組が担当し（略）極めて短時日の間に此大建築を完成（略）即ち11月4日には早くも各官衛連合の修祓式が中央気象台の大会議室で開催されたのであった．」(2)

「時恰かも紀元2600年祝典の直前に当ったこと及び其他の都合から各課の移転は早急に行はれることになり，11月7日から移転を開始し8日には全部終了した．」

この年10月12日大政翼賛会の発足と共に所謂近衛新体制運動の喧伝を見，11月10日紀元2600年記念式典は全国的に華々しく挙行された．

8.4. 退　職

武松が何時から退官を考慮したか詳かでないが，事変以来の繁忙と老令とがこれを促した．

岡田武松退官御挨拶(3)に「実を云ふと私も4，5年前に退官を御願ひすべきであった」とある所より，昭和11年頃退官を考慮したことが知れる．しかし，既述の如く，日支事変の勃発による気象事業国営移管問題が起り「夫れが片附いてからと思」った．それでも準備はぼつぼつ始めて蔵書の整理やその置場を作るのに2年余かかった．

国営移管は，細部の完了は兎も角，昭和13，14年度で一応その大半を終えた．そして気象事業の一元化に伴う台長事務の繁忙は愈々つのった．

「夫れに国営移管後は書類が殖える一方で，之に目を通すに半日はかかり，御来談の方も増す一方で，この方々に御目にかかるにも，矢張り半日はとられて仕舞ふと云ふ具合であり，如何に健康を誇っていた老生でもヘトヘトになって仕舞ひました．兎も角も中央気象台長の職務は此節は全く文字通りの劇務となりましたから，老人などでは決して勤まりっこはないのであります」(1)

支那事変の拡大につれて，一面軍方面より屢々不当の要求があった．奥山奥忠氏によれば

「昭和13，4年頃よく某方面から気象業務上の措置につき種々の要求あり，甚だしきは気象電報の直送の請求が極めて執拗だったが，需用のことは気象台の方から適当に処理するからと断固拒絶した．かかることから先生の身分にまで容喙されたことと，それを拒絶したことを主管庁から聴かされた」

この頃軍関係の交渉は頻繁となり，海軍は主として大谷東平，陸軍は畠山久尚であった(2)．企画院の気象審議会には藤原咲平，奥山奥忠が出た．

時代は更に激動を止めなかった．既にして，昭和14年9月第2次世界大戦が起った．15年9月には日独伊軍事同盟の調印，翌10月は既述の大政翼賛会設立を見た．河合栄治郎（昭和14年3月），津田左右吉(15年3月)の筆禍事件は，何れも起訴に至り．後者には岩波茂雄が係わった．やがて，嘗ての「測候瑣談」発行人小林勇の拘禁を見る．

雷災の復舊なって，武松は昭和15，16年の交に辞表を呈出したが，文部当局の切なる慰留によりなお職務を執り続けた．

昭和16年7月2日の御前会議で採択した「国策要綱」は「南方進出の態勢を強化」「目的達成の為対英米戦を辞せず」とし，同7月28日日本軍は南部仏印に進駐した．

大谷博士によれば(3)

「岡田先生がやめられたのは，開戦已むなしと御承知になった時（略）やめられた直接の動機は先生が抱いておられた気象台のあり方というものを軍によってまげられたと思われたからである．すなわち先生は日本の気象事業は気象台がやるべきであるとの信念を持っておられたが，当時陸軍の勢力が強くなってくると，気象電報を陸軍の方へもよこせといって来た．（略）最後にどうしても陸軍に気象専用線を分線しなければならないことになった．その時私は岡田先生の所に参って≪先生もう駄目です≫と申し上げた．」

かくて岡田武松は，運命的な日米開戦の前夜，42年に及ぶ中央気象台の職務を離れた．履歴書は，昭和14年10月26日，叙勲一等授瑞宝章．同11月1日任気象技監叙高等官1等．昭和15年4月29日支那事変に於ける功により旭日大授章及び金1500円を授け賜ふ，同日支那事変従軍記章会の旨により従軍記章を授与せらる．昭和15年6月29日学術研究会議副会長就任．昭和16年7月29日新

(1) 測候時報　11巻12号　中央気象台類焼
(2) 測候時報　11巻6号　同扉写真参照
(3) 岡田　測候時報　12巻8号

(1) 岡田　同　上　(2) 大谷　天気　4巻2号
(3) 大谷，同上

に親任官の待遇を賜ふ，同日叙正3位．同7月30日依願免本官．

藤原咲平は武松の後を襲って第5代中央気象台長となった．

この年の夏，各管区毎に気象協議会が催された．

「時局の要求により8月より気象新体制を至急に布くに至ったので，之を完全に施行する必要上臨時気象打合会が各管区毎に催され，8月13，14日は大阪，同23，24日は札幌，29，30日は東京，9月5，6日は福岡で開催された」(1)席上藤原は台長新任挨拶と気象事業の臨戦体制につき述べた．

10月18日東条内閣の成立を見た．そして12月8日，中央気象台長藤原咲平は，気象官署長，観測所長，出張所長，朝鮮総督府気象台長，台湾総督府気象台長，関東気象台長，樺太庁気象台長，南洋庁気象台長宛に次の訓令を発した．

「本日英米両国に対し宣戦を布告あらせられたるに付き全気象官署は予て準備せる所に従い戦時態勢に入れり，貴職は部下を督励して観測通報の万全を期し以て必勝皇軍の大業に寄与せらるべし」

9. その死

武松は退官時の心境を自ら次の如く語った．

「私は予てから退職するときは出来得べくんば秋にならない内にしたいと願ってゐました．退職するときは誰しも一抹の淋みを感ずるものですから，秋になって虫の音が聞えて来てからでは一しほの淋しさを覚えるので甚だ辛らいからであります」(2)

ここには絶唱の響きがある．岡田武松の生涯を叙してここに至った筆者は，掬水の指を漏れる思いであった．栄達は必らずしも凡てではない．そして，如上武松出生よりその退職に至る叙事に一点の晴を点ずるものがあるとすれば，それは武松晩年の悲劇に如かない．偉れた生涯は常に内心の劇であり，それは屢々避け難くパセチックであった．藤原咲平に後を托した武松も，自らの運命を変へることは出来なかった．かくて時代そのものもまた悲劇的であったその晩年は書かれるべきである．遺憾ながら，当時筆者は資料と時間のいづれをも持たない．以下単に大要を摘録するにとどめる．

昭和16年退官と共に武松は故郷布佐に移り住んだ．少年時に変らぬ利根の流れに既往を思い，また果てしなく拡大する戦乱に行末を思った．

布佐の家は，既述の通り，大正5年母ひさのために建て，昭和5年洋館を増築したが，今や自ら老年を養う所となった．やがて離れを新築した．

「田舎で不自由ではあるが，そんな(東京)のワビしい生活をしなくても済む」ので「役所は勿論学界へも決して出しやばるまいと決心をした」ただ「かねて企てていた≪気象学辞典≫を完成」するため，時偶資料閲覧のため上京する，そうした生活であった．身分は気象調査事務嘱託，年手当3000円給与．

昭和17年7月，改稿気象学講話が岩波より刊行された．初版以来改訂増補すること約10回，全篇を書き改めること実に3度に及んだ．同じく7月，続いて航空気象学が「航空事業に従事せらるる青年諸君が気象学の一斑を学ばんとする時の階梯ともなる様」刊行された．

昭和17年より19年に亘り，「理論気象学」上中下3巻が刊行された．

「この書物は老生が曩に著述した〝気象学〟の姉妹篇であります（略）名は理論気象学と云って如何にも厳めしくありますが，実は一般気象学中の稍々理論めいた部分を取り集めて，強ひて体系附けようとしたものに過ぎません．」

「本書の稿本は，往年中央気象台附属の気象技術官養成所に於て為したる気象学講義の草案を整理して，之に新規の資料を附け加へて作成したものであります」

これらは総て1000余頁に達し，古稀になんなんとしてなお健筆は壮者をしのいだ．

武松の履歴書は，なお，中央気象台参与被仰付(17年7月15日）学術研究会議会長就任（18年4月20日）教科用図書調査会委員被仰付（18年10月18日）等を記した．

しかし乍ら，昭和18年は既に戦局漸く敗色を見せ始め，ガダルカナルの撤退やアッツ島に米軍上陸を見た．

「米国や英国となぜ戦争などをするのだろう．絶対に勝味などはありはしない．日本もここまで来たら，いちど戦争に負けなければ，とても目は覚めまい」(1)

これは嘗て退官直前海軍軍令部に呼ばれ開戦の機密を聞かされた帰途武松の言葉であった．彼はまた，支那事変以降終始戦争を非難した岩波茂雄と，始まった以上はやらねばならぬとする藤原咲平との議論を想起した．(2)

昭和18年9月岡田群司は中央気象台勤務となり布佐出張所柏出張所にも籍を置いた．経線儀製作所と測器製作所の予算請求が，18年末前者のみ通り，19年4月22日布川出張所として発足，群司はその長となって武松の近辺に起居することとなった．

武松が兼てその嗣子を持たぬ心算であったことは既に述べた．しかし乍ら，昭和18年に至って，彼は何故かこの決意を翻した．岡田家戸籍謄本に次の記事が見える．

「養女えみ子，大正15年10月22日生，東京市本郷区駒込西片町10番地戸主抜山大三三女岡田武松同人妻みつと養子縁組届出昭和18年6月30日受付入籍」

やがて，昭和19年6月サイパン陥落，同11月より本土空襲が始まった．中央気象台は「空襲火災でわ昭和20年2月25日に本館を同年5月25日に予報課別館をやられた」(1)2月25日の空襲で，焼け跡から焼夷弾200本近く

(1) 測候時報　12巻9号
(2) 岡田，退官御挨拶．測候時報　12巻8号

(1) 大谷，天文と気象．22巻10号
(2) 藤原，弔詞．群渦

が見出された．海洋気象台は昭和20年3月17日及び6月26日の再度罹災，前回では佐野堤二他3名の殉職者を出し，次回の6月遂に旧本館が焼失した．20年8月15日早暁高層気象台本庄出張所罹災，そしてその正午敗戦．この日藤原咲平は「噫，悲痛極まりなし，涙流れて止まず」と記した．

敗戦は老いたる武松に安らかな余生を送らしめなかった．長年に亘る知己で，また彼の著書の刊行者岩波茂雄は，敗戦直後の昭和21年4月その生を終えた．

21年の夏武松は養女えみ子に養子をとった．

「壻養子敏夫，大正13年1月23日生，茨城県北相馬郡北交間村大字須藤堀1020番地戸主渡辺徹夫弟昭和21年8月8日岡田武松養女えみ子と壻養子縁組婚姻届出同日入籍」

やがてえみ子は，昭和22年7月25日祥子を，昭和24年2月21日恵夫を生み，恵夫は2月28日届出受付入籍した．同日えみ子敏夫は東葛飾郡布佐町布佐2972番地の1に新戸籍編製にて除籍，祥子もこれに随って除籍となった．1カ年余にて再転し，昭和25年3月20日，祥子恵夫はいづれも共に武松みつの養子となりその届出受付が見られた．

これより先，昭和22年4月，藤原咲平は中央気象台長を和達清夫に譲り，気象災害軽減を掲げて参議院選挙に立候補し，4月7日総司令部情報部指令 550号附属書AのB項該当にて公職追放となった．翌23年胃を患い，25年9月22日東大物療内科病棟に死去した．

武松は，老令にも拘らず，昭和23年3月政令第56号による嘱託制度廃止の後も引続き中央気象台附属気象技術官養成所講師として教育に従うことをやめなかった．昭和24年6月1日中央気象台参与となり，昭和26年4月1日政令第63号中央気象台組織令の一部を改正する政令によって参与制度廃止となり，養成所も「中央気象台研修所」となったが，なお授業を担任した．

武松は著述を続けた．昭和23年春以来養成所生徒のために気象学史を講じ，「気象学の開拓者」（昭和24年8月刊）が成った．また翌24年12月刊行の「気象学通論」は，気象学講話及び気象学上下巻の版本既に尽き再刻困難の故，「両書中間の程度の一般気象学書を編纂」したのであった．昭和26年4月旧著「雨」を加筆訂正の上岩波より再刊した．

この間の昭和24年11月3日，武松は文化勲章を授与された．共にその栄を担った者に，志賀直哉，谷崎潤一郎などがあり，同日陪食を賜った．

文化勲章稟申に際しその功績調書は次の如くであった．

功　績　調　書

日本学士院会員正三位勲一等岡田武松

右は明治32年7月東京帝国大学理科大学物理学科を卒業直ちに中央気象台技手となり天気予報と暴風警報に関する至難な業務に従事し明治37年8月中央気象台技師に任官大正8年2月より東北帝国大学教授を兼任3年有余気象学に関する講義を行い次で東京帝国大学教授を兼任9年余にわたって地球物理学講座を担当特に気象学の指導と研究に当った昭和14年2月気象技監となり昭和16年7月退官するに至るまで気象台にあること実に42年有余に及ぶこの間大正9年8月海洋気象台長大正12年6月より中央気象台長の要職に補せられた同人が気象事業に従事した頃はあたかも我国気象観測の揺籃期であったが同人は我国の特殊な地理的環境に処して着々天気予報法の科学的基礎を築き同時に全国の要地に観測網を整備拡充して遂にわが国の気象事業を国営として統一し世界的水準に引上げることに成功した例えば海上の船舶よりの気象電報の受信開始海洋気象台の創設柿岡地磁気観測所の整備気象技術者養成機関の創設等一として同人の工夫努力にまたないものはなく又中央気象台長就任以後は最も理想的な組織機構の整備に寝食を忘れて努力し文字通りわが国気象観測事業の生みの親と称されている．

かくして同人が営々心血を注いだ結果わが国の気象学のみならず地球電磁気学海洋学の基礎が確立せられたのであってその功績はまことに大なるものがある．

更に同人は以上の如き激職にありながら常に気象学の研究を重ねその成果を発表した著書論文は三十数篇に上っているが特に著明なる研究業績を一二概説すれば明治43年発表した「梅雨論」においてわが国の梅雨の起源について調査研究しその結論は今日に至るも不変の学説として認められているすなわち本邦朝鮮支那等における天気状態を徹底的に調査究明しそれ等の基礎資料に基いて従来の学説に分析検討を加え梅雨は6月—7月本邦東部に位置する高気圧のため本邦附近を通る多数の低気圧の速度が遅くなりその結果生ずる現象であることを断定公表したのである．

また季節予報上の学説として大正8年及び同11年の二回にわたり北海道の米作の予想に対する研究の結果米の収量は根室の冬の気温とは正の相関ダッチハーバーの冬の気温とは負の高い相関があることを発見したこの研究は国民関心の的である米作問題に関連した実際的に重要性のあるもので季節予報上に一新生面を開拓しその基礎を築いたものである．

その他「岡田の法則」と称せられる高低気圧の運動に関する法則を発見しあるいは地球磁気の変化に関し調査研究して地球磁気学の発達に貢献し更に同人の編集した「日本の気候」(The Climate of Japan) は関係各分野の研究にもきわめて貴重な参考資料として活用せられる等その学術的業績は内外学界のひとしく景仰するところでありこのことは同人が学士院会員に選ばれ更に学術研究会議副会長の要職を占めたこと又大正13年11月英国王立気象学会より斯界最高の名誉であるサイモンズゴールドメダルを贈られたことまた同14年同学会の名誉会員に選

(1) 藤原，雲をつかむ話．299 頁

ばれた事実によっても明らかである．

以上の如く同人はわが国気象事業に一身を捧げその発展のために画期的偉績を挙げ幾多優秀な地球物理学者気象学者をその門下に輩出せしめたばかりでなく自らも重要なる研究を行い学術面行政面を通じわが国文化の進展に寄与した功績はまことに顕著なるものがある．なお同人が発表せる学術上の著書目録を別紙の通り添附する．（別紙略）

時代はさらに変転をつづけた．昭和24年10月中華人民共和国成立，昭和25年6月朝鮮戦乱勃発し，そして26年9月の講和条約調印に至る．

昭和26年2月3日午前6時25分，妻みつが本籍地で死亡した．みつの死が武松にとって何を意味したか．生前親しく岡田家を訪れたものは，武松の生涯が正しくその半ばをみつに負うことを認めるに躊躇しなかったという．やがて妹長島みつが同居して武松の身辺を見た．

妻を失った武松は時に幼少時を思った．昭和28年12月，既述の如く，武松はの旧師篠崎博文の小伝を撰した．

かくて，武松晩年の孤独が極ったかに見えた時，祥子恵夫に対する親権辞任を見る．

「養父岡田武松親権辞任届出昭和29年3月4日受付昭和29年3月4日親権を行う者がないため後見開始同月16日後見人東京都文京区駒込西片町10番地抜山大三同籍易就職につき届出」

武松は昭和29年6月23日を最後とし研修所普通科に電気磁気学を講ずることを止めた．同30年5月以降萎縮腎を病み，後一時少康を得た．10月30日姉松永やす死去にショックを与えられたかに見え翌11月1日夕刻激しい発作を起し呼吸困難，自らも死を予感した．翌2日また午前午後各1回の発作．そして，同年末に至るまで食慾なく，ようやくにして群司の奨めるそばを摂る．年改まって持直し，再び31年5月やや悪化後一進一退した．

昭和31年6月17日，武松は近世気象学史の原稿に自序を記した．これは1941年以降の事項につき荒川秀俊の補訂を以て「世界気象学年表」と題し，武松の死後（31年11月）地人書館気象学講座別巻として刊行された．

武松の謄本は次の一行で終っている．

「昭和31年9月2日午前3時47分本籍地で死亡同居の親族岡田群司届出」

即ち，武松は9月1日午後7時過ぎ軽い発作を起した．直ぐおさまって，急拠はせつけた抜山夫妻はそのまま泊り，群司は布川へ帰った．2日早朝附添看護婦が病状の急変に抜山夫妻を起して病室に戻った時，早や武松は独りこと切れていた．病名は萎縮腎に加うる急性心臓衰弱，享年83才であった．

9月4日，布佐自宅にて告別式挙行，宮中よりは祭粢を賜った．翌々9月6日，東京青山斎場にて気象庁葬が執行された．法名は天徳院殿顕光理道大居士．墓所は布佐町布佐2318番地真言宗延命寺．

岡田武松略年譜

明治7年　1才　8月17日千葉県東葛飾郡布佐町布佐に父由之助母ひさの2男として出生

8年　2才　内務省地理局量地課に気象掛置かる，

9年　3才　函館測候所（明治5年創立）に次ぎ札幌に測候所設置，

10年　4才　正戸豹之助気象掛主任，荒井郁之助測量課長となる

11年　5才　長崎測候所を初めとし気象観測網整備緒につく

12年　6才　中村精男和田雄治地理局に入る

13年　7才　中村，和田，富士山頂に観測

14年　8才　布佐の小学校勝蔵院に入り傍ら和算家篠崎博文に学ぶ

15年　9才　クニッピング地理局に入る　この年東京気象学会発足

16年　10才　暴風警報事業始まる　天気図配布

17年　11才　初等小学修了

18年　12才

19年　13才　東京にて毎時観測開始

20年　14才　中等小学修了　この年気象台測候所条例公布

21年　15才　大日本気象学会発足

22年　16才　上等小学修了　続いて日比谷の東京府尋常中学校に入り親戚に止宿して通学

23年　17才　中央気象台官制公布

24年　18才　クニッピング帰国　濃尾大地震

25年　19才　4月6日尋常中学を卒え本郷追分の第1高等中学校に入る　この頃既に気象学に志す

26年　20才　中村精男「大日本風土篇」

27年　21才　日清戦争始る

28年　22才　気象台文部省に移り中村精男台長となる

29年　23才　7月7日第一高等学校大学予科第2部学科卒　続いて東京帝国大学理科大学に入る　この年三陸津波

30年　24才　佐藤順一入台

31年　25才　9月台風のため利根川決潰

32年　26才　7月10日東京帝国大学理科大学物理学科を卒え7月22日中央気象台技手となり予報課に入る

33年　27才　この年より開催の気象観測練習会に気象学を講じまた気象集誌に次々と論文発表

34年　28才　10月25日茨城県北相馬郡布川町海老原精一長女みつと結婚「近世気象学」刊行

35年　29才　臨時地磁気観測を嘱託さる
36年　30才　天気予報暴風警報規則改正さる
37年　31才　2月長女易出生　6月中央気象台欧文報告創刊　8月和田雄治の後を襲い中央気象台技師予報課長兼臨時観測課長となり高等官7等従7位に叙せらる　この年日露戦争始まる
38年　32才　予報責任者として日本海海戦時の予報をも担当
39年　33才　明治37，38年事件の功により勲6等単光旭日章を賜う　高等官6等正7位　この年霜害により農業に関する気象の調査を嘱託され寺田寅彦と知る
40年　34才
41年　35才　「気象学講話」自費出版　東京帝国大学講師を嘱託さる　高等官5等　この年天気予報暴風警報規程地方天気予報規程等改正　凍雨論争行わる
42年　36才　富士山と沼津にて日射観測　この前後より眼を病んで禁酒す　従6位となる
43年　37才　梅雨論を発表　海上気象電報規程実施　この年水害により治水問題起る
44年　38才　梅雨論にて理学博士を受く　高等官4等正6位となる　森林気象に関する事務嘱託　この年藤原咲平気象台に入る
大正元年（明治45年）39才　寺田寅彦大森房吉等と気象学談話会を組織　潮岬測候所事務開始　叙勲5等授瑞宝章　この年甥群司開成中学通学のため止宿
2年　40才　東亜気象台長会議（東京開催）に出席　高等官3等従5位となる　衆院にて海洋調査機関設立案可決
3年　41才　桜島爆発　この年対独宣戦す
4年　42才　大正3，4年事件の功を賞さる　安藤広太郎東北凶冷論気象集誌に連載
5年　43才　「雨」刊行　この年布佐の家を建て母ひさを住わす
6年　44才　北海道の米作と気象の関係を論ず　この年水害甚だしく気象事業改革の気運起り海洋気象台高層気象台の設立計画緒につく
7年　45才　発電水力調査に関する事務鉄道院の事務嘱託　勲4等瑞宝章を賜い正5位に叙さる　この年中央気象台臨時大阪出張所設置
8年　46才　東北帝国大学理科大学教授兼任高等官2等となる　4月海洋気象台起工　10月臨時大阪出張所神戸に移る　この年伊吹室戸測候所開設
9年　47才　8月25日気象台官制公布に伴い同26日海洋気象台長となり神戸に赴任　学術研究会議会員となる　この年中央気象台は旧本丸より麹町元衛町1番地に移転　館野に高層気象台設置　またこの年4月父由之助布佐にて死去
大正10年　48才　7月国際気象会議出席のためロンドンに出発12月帰朝　この年英王立気象学会の fellow となりまた「気象学」の執筆を始む　海洋気象台器械検定及調整規程施行「海と空」発刊
11年　49才　2月より9月に至る中村中央台長渡欧中台長代理被命　叙勲3等授瑞宝章　海洋気象台欧文報告発刊　海洋気象台無線電信所竣工　中央気象台附属測候技術官養成所設立
12年　50才　2月中村中央台長退官後台長事務取扱被命　7月中央気象台長兼海洋気象台長となる　9月関東大震災にて中央気象台罹災これによつて気象事業の再編を決意　この時また「気象学」原稿焼失　この年航空評議員震災予防調査会委員となり従4位に叙せらる　北太平洋天気図発刊
13年　51才　英王立気象学会よりサイモンズ賞を授けらる　中央気象台仮庁舎無線通信施設竣工
14年　52才　英王立気象学会名誉会員　震災予防評議員となる　養成所校舎柿岡地磁気観測所庁舎中央気象台製作工場竣工　地震観測網整備　沖縄測候所事務開始　この年中央気象台創立50周年記念式を挙行また地震研究所設置さる
15年　53才　東京帝国大学教授兼任　地震研究所員　高等官1等となりチューリッヒ開催の国際気象協議会常置委員会議出席のため渡欧　この年海洋気象台書庫成る
昭和2年　54才　初版「気象学」刊　春風丸進水　富士山頂に観測小屋設置
3年　55才　正4位に叙せらる　「気象学講話」増訂版刊　海洋気象台印刷工場成る
4年　56才　Climatic Atlas of Japan and her Neighbouring Countries 完成　叙勲2等授瑞宝章　雷雨警報開始　海洋時報発刊　この年6月7日天皇海洋気象台に行幸
5年　57才　中村精男死去の後大日本気象学会会頭となる「地球磁気学」（岩波講座）刊　この年中央気象台管理事務に「航空気象の観測及調査並に航空機に対する天気予報及暴風警報」の項加わり大阪三島福岡の3支台箱根等の附属測候所設置　この頃布佐の洋館増築　11月母ひさ死去
6年　58才　陸軍省より気象に関する講師嘱託　Climate of Japan 刊　「気象器械学」刊　学士院会員となる　この年岩波書店より雑誌「科学」発刊その編集委員となる
7年　59才　在職30年記念論文集を贈らる　「北太平洋の気象」発刊　この年第2極年のため富士山頂山麓豊原に観測所設置また飛行機観測開始
昭和8年　60才　「測候瑣談」刊　従3位航空事業調査委員となる　海洋気象台クロノメーター修理開始　智明寮開設　雷雨予報開始　この年満洲国中央観象台官制公布

9年　61才　昭和6年乃至9年事変の功を賞さる　凶冷論発表　この年9月室戸台風関西を襲い臨時議会気象事業の予算増額を認め凌風丸建造決る　続いて臨時気象協議会召集して諸対策協議

10年　62才　海軍航海学校気象学教授嘱託　6月1日中央気象台60周年記念式にて気象事業発展の功労者として感謝状を贈らる　「改稿気象学」刊　この年天気予報暴風警報規程等改正　中央気象台に凶冷調査掛をおく

11年　63才　海軍省気象事務嘱託となる　この年海洋気象台新庁舎測風塔竣工　海洋観測法刊　八戸測候所事務開始　この頃より退職を考慮

12年　64才　「気象学礎石」上巻刊「続測候瑣談」刊　災害科学研究所開所　凌風丸進水　札幌支台屋久島測候所事務開始

13年　65才　科学振興調査会委員となる　この年布佐出張所にてゾンデ観測開始　大島測候所事務開始　測候所一部国営に移管さる　また陸軍気象部令公布を見陸軍より気象電報直速の請求あり　岩波全書「気候学」刊

14年　66才　3月気象事務打合会にて測候事業改善案につき講演　10月気象官署官制公布　叙勲1等授瑞宝任章気象監高等官1等となる　この年気象事業国営移管成る

15年　67才　支那事変における功を賞さる　学術研究会議副会長となる　この年中央気象台は高松宮の台臨を見6月20日雷災に焼失11月復興建築落成年末頃辞表呈出して慰留

16年　68才　正3位に叙せられ親任官となる　老令と事変以来の繁忙により7月30日依頼免本官となり布佐に居住　31日付にて中央気象台より気象調査事務を嘱託さる　第5代台長藤原咲平　この年中央気象台柏出張所開所　12月8日太平洋戦争勃発　岩波講座物理学中「大気物理学」刊

17年　69才　中央気象台参与となる　「改稿気象学講話」「航空気象学」「理論気象学」上巻刊　この年柏に養成所校舎新築さる

18年　70才　学術研究会議会長就任　教科用図書調査会委員となる　「理論気象学」中巻刊　この年坂山　大三3女えみ子を養女とす

19年　71才　気象技術官養成所特別講習科講師を嘱託さる　「理論気象学」下巻刊　この6月サイパン陥落後本土空襲始まる

20年　72才　統計数理研究所参与となる　2月25日中央気象台本館空襲罹災　3月17日6月26日海洋気象台罹災　8月15日の敗戦により気象事業は米極東空軍の管理下に入る　この年布川出張所開所

昭和21年　73才　8月茨城県北相馬郡北交間村渡辺敏夫を壻養子とす　この年気象職員組合発足

22年　74才　7月祥子出生　この年藤原咲平台長を和達清夫に譲り参院選挙に立候補して公職追放となる

23年　75才　3月嘱託制度廃止により気象技術官養成所講師に任命さる　この年フィリー案をめぐる気象官署機構改革問題起る

24年　76才　2月恵夫出生　えみ子敏夫新戸籍編成で除籍　中央気象台参与　「気象学の開拓者」「気象学通論」刊　11月3日文化勲章授賞　この年官庁行政整理

25年　77才　3月祥子恵夫を養子とす　この年藤原咲平死去　朝鮮戦乱始まる

26年　78才　2月妻みつ死去　「雨」再刊　この年気象技術官養成所は中央気象台研修所となり参与制度廃止　引続き研修所講師となる　講和条約調印

27年　79才　研修所普通科に電気磁気学を講ず　妻死去以来妹長島みつ同居

28年　80才　未だ教育に倦まず普通科授業にたづさわる

29年　81才　3月祥子恵夫に対する親権辞任　6月23日を最後として研修所出勤を止む

30年　82才　5月以降持病の萎縮腎　11月1日夕刻発作呼吸困難翌2日再び発作

31年　83才　9月1日夕刻発作　9月2日午前3時47分死去　同4日告別式同6日青山斎場にて気象庁葬　「世界気象学年表」気象学講座別巻として刊行　この年の7月中央気象台は外局に昇格して気象庁となる.

後　記：—

本稿は日本気象学会の嘱に依って成り，同学会会誌　「天気」に昭和32年1月より6月に至って掲載した．叙事の方法は，原則として既刊資料に基き，考証には亘らなかった．この謂わば間接的方法は，必ずしも最上でなく，便宜的のものに過ぎない．

後日のため資料の出所は，その都度煩を嫌わず明示した．但し武松幼少時の記述その他については，本文には記さなかったが，甥岡田群司氏に負うところが多い．その旨ここに明記して謝意にかえる．なお一々氏名は掲げないが，関係資料の蒐集に際しては同学知友諸氏より種々高教を得たことを附記しておく．しかしながら本稿中資料の取捨はすべて筆者の判断によった．従って，文責はすべて筆者にあることは言うまでもない．

最後に，本稿執筆は少なからず時間の制限を受けた．為に資料の渉猟極めて不充分であり，到底清鑑を期し得ないのみか，重要事項の脱落乃至不測の誤なしとしない．叱正を得れば幸である．

—1957・5—